

会員紹介：佐藤光男さん

私の略歴



1961年3月、慶応義塾大学経済学部卒業、同4月三井物産株式会社に就職、化学品部門に配属。取引先与信業務、海外プロジェクトを経験後、New York, Houston の技術部での技術探索、導出入業務、各商品部門の営業、運輸担当を経て帰国後イラン石油化学プロジェクトに従事。1978年イランより帰国後広報室、化学品総括部、業務部、中東三井物産（バハレイン）副社長、サウジアラビア Alkhubar 所長、1989年帰国後は韓国石油化学JVなどを担当。

1992年ユニコ・インターナショナル社、その後国際開発アソシエイト社。専門分野は貿易実務、Logistics、プロジェクトマネジメント、合弁会社経営、市場調査・開拓、統計、産業開発など。

始めに

改めて気が付いたのは、筆者には生き方といった大層な理念は無く、好奇心の赴くまま、他人とは多少変わったことをしたい、ということ生きてきた。その延長で商社に入り、貿易取引と周辺の活動を通じてある程度の結果を出せたと思っている。大東亜戦争直前に生まれ、敗戦前後の混乱時を幼少ながら経験し、数学・音楽に没頭し、大学では数理経済学を専攻、国外でグローバルな活動をしたいとの希望から三井物産で過ごし、その帰結としてODAの世界に流れ着いた、という次第。そのため本稿では、出生から商社勤務の中での活動と経験と学んだことを時系列で紹介し、次いでODAの世界での仕事の経験と所感について述べることにしたい。

仕事上の苦勞、達成の喜びに付いても言及する項目があったが、小生に関しては記憶に残る苦勞は無い。寧ろ、米国勤務、イラン勤務の傍ら Project Management を学び、限られた時間、予算、労力で設定された目標を達成することを先ず計画する癖が付き、それに沿った行動を心掛け、予定が狂った場合の代替案（Plan B, C 等）を考えておくことが多かったため、途中の苦勞とその解決というより、最終目標達成・任務終了の喜びの記憶は心に刻まれている。イラン革命に伴うイラン石油化学からの撤退、四エチル鉛計画の廃棄は一個人の力量を超えた力によるものではあるが、当時の挫折感は大きかった。ODA 関連のプロジェクトでもチームで行うものでは個々の担当業務の遂行に関する苦勞はあったが、最近でのケニア、ドミニカ共和国、スーダンでの仕事は個人ベースでの業務であり小生に全責任があり、Project Management の応用で目標達成を成し遂げた達成感を味わうことができた。

生立ち

昭和13年東京都麹町区永田町で生まれた。実家は料亭。場所は地下鉄赤坂見附駅前。現在 Prudential Tower が立っている。裏は府立一中（現在の日比谷高校）。昭和11年

2月26日、所謂2.26事件があり、実家は「反乱軍」に占拠された。その後実家の名前が知られるようになり、両親が見合い結婚、筆者が生まれた。事件がなければ筆者は存在していなかった可能性大である。今世紀になって New York の Word Trade Center のテロが起こった9月11日が筆者の誕生日というのも偶然の一致ではあろうが気味が悪い。

最初の記憶は3歳頃、家の前の「遅刻坂」を一中の生徒たちが駆け上ってくるのを追いかけたことなど断片的なものではあるが、その後昭和18年に妹が誕生した後まで、「戦時」の暗い雰囲気は感じていない。昭和19年になり、「サイパン島は敵の陣」なる歌がNHKで放送された頃以来、空襲が頻繁になり、那須、その後古河へ疎開し国民学校に入った頃から配属将校がやたらに怒鳴り散らしていやな思いをしたこと、土地の子供たちに東京っ子として目の敵にされ、虐められたことなどを散発的に思い出す。

敗戦後東京に戻り、銀座7丁目で両親は料理屋を再開した。隣の6丁目の松坂屋の地下は米兵相手のキャバレー、銀座通りには露店が犇き、服部時計店、松屋などは接収されてPX（米兵相手の売店）となっていた。後年NHKの番組で戦後、日本女性を守るため銀座7丁目の料亭「幸楽」で警察が各地の売春宿の主人を集め米兵相手の施設を作るための打合せをしていたとの事実を述べていたが、そのころの筆者は7-8歳、何も知らなかったのは当然。銀座幸楽には戦前からのコックが多数居り、彼等は区画の半分を使って支那料理屋を開いていた。支那人は戦勝国民として肩で風を切っていたといわれるが筆者の周りではそのような雰囲気はなかった。嫌な奴も、良い人も居た。筆者の父親は戦時中三十代半ばで徴兵され上海近くの南通に駐屯していた。シナ最前でシナの素晴らしさを吹聴していたが、終生彼等をシナ人と呼んでいた。母とコックが会話するときにはコックは自分を「シナヒト」と言っていた。戦後ある時期から呼び方が半強制的に変わったようだが、筆者自身の癖は抜けず、読者に違和感を齎したとすれば申訳なし。朝鮮人が三国人と呼ばれ威張っていたと言われるが、筆者はそのようなことは経験していない（日本人は敗戦国民、自分たちは違うということだろうが、彼等も戦時中は日本人として鬼畜米英と戦っていた）。帰京後慶応幼稚舎に入り、大学卒業まで慶応で過ごした。担任はガダルカナル帰りの海軍兵の暴力教師、日教組とは無縁の環境で育った。

三井物産での経験

1961年に経済学部を卒業、三井物産入社、化学品部門に配属された。初めの仕事は取引先の与信管理、総務全般。1964年に技術部 New York で全商品部門の有望技術の探索、技術導出入取引に従事した。同地では世界博があり、地下鉄も化粧替えされ、Park Avenue をまたいでグランドセントラル駅の上に立つ Pan Am ビルの38-40階に事務所があった。ビートルズの人気が出始め、ブロードウェイのミュージカルでは My Fair Lady, Fiddler on the Roof, How to Succeed in Business without really trying などが掛っており、休日には同僚との博物館、劇場、コンサート、書店巡りを堪能した。Pablo Casals が存命で、Vermont まで馳参じ蚊に食われながら、椅子に座っての彼の指揮姿を見たのを思い出す。その時は入場券よりレンタカー代金の方が桁違いに高くなった。

その後石油・石油化学の中心地の Texas 州 Houston で技術導出入と平行して全商品部門の対米輸出入、第三国商売の経験をした。加えて米国内の国内商売、運輸も経験した。総員 10 名以下の小さい店ならではの経験であった。以前日本のコメが不足して輸入の動きがでた際、一粒たりとも入れさせない、との議論があったが、コメ輸入は戦後長く続いていた。食糧庁の最後のコメ輸入を落札した三井物産の米国からの輸入を Houston 店で担当したのは筆者である。Arkansas 米の NATO という Rice Mill からのもので、余りの旨さに驚嘆した。そのころの東京での配給米の不味さを筆者は覚えている。米は統制下にあり、闇米はふんだんに流通していたが、競争原理が働かず、決して旨いものではなかった。転勤の際、出始めた東芝の電気釜を持参したが、その NATO 米を焚いて食べたときの感激は忘れられない。

Houston は Texas 州の Harris 郡にあり、Texas の石油、石油化学産業の中心として発展しており、北の Dallas-Fort Worth と張り合っていた。メキシコから独立した後暫くは独立国、その後合衆国に参加した経緯もあり、独立指向が強かった。然し、南北戦争では南部に属し、敗戦を経験している。New York の Manhattan と異なり、Houston では公共交通機関は皆無に近く、通勤、買い物など車での移動が必須であり、発売されたばかりの Mustang を無理して購入、近郊から周辺のドライブを満喫、西部各州を同僚とドライブで廻り、できたばかりの州際高速道路（殆どが無料の Freeway）を満喫した。日本車は未だアメ車の敵ではなく、時々見かけるダットサン、トヨペットは高速道路でエンコしていた。

当時も現在も、日本の石油化学はナフサを原料とするエチレンプラントを基にコンビナートが形成されていたので、主要原料のエチレン以外にプロピレン、C4 留分（ブタジエンなど）、分溜ガソリン（ベンゼンなど）の副製品が発生し、これらの効率よい利用が課題である。米国、ドイツでは第二次大戦時からタイヤ原料としてブタジエン、スチレンから SBR ゴムを合成していた。ブタジエンは製油所からのブタンを脱水素して製造していた。これに比べエチレンの副産物である日本のブタジエンは割安で、米国に運んでも競争力があつた。ブタジエンの需要家は東海岸、中西部に十数社あり、これらに対する売込み仕事を担当、その後長期に亘る商流の開始に貢献できたことは嬉しい思い出である。

Houston の東に Beaumont 市があり、近くに Texas 州の最初の自噴石油井、Spindle Top があつた。更に東に Sabine 川を挟んで Louisiana 州があり、ここはフランス的な雰囲気を残した Cajun というカナダ起源の人々が残っていた。New Orleans では欲望という名の電車はまだ走っており、バーボンストリートはジャズ、異国情緒で観光客を集めていた。洗濯屋には White Only という掲示をしているところも多く、黒人差別は依然残っていた。南部各州には Dixieland という言葉はノスタルジアとして残っており、北部に対する Yankee Go Home 的な心情は随所に感じられた。

Halloween の時に日本人留学生が自宅侵入とかで射殺される事件のあつた Mississippi 河添いの Baton Rouge 市には、Ethyl Corporation の四エチル鉛の工場があつた。当時

日本にはハイオクタンガソリン添加物は生産されておらず、米国の Du Pont, Ethyl Corporation, 英国の Octel 社などから輸入していた。東洋曹達、三井化学、三井物産は Ethyl 社の技術での国産化を計画し、技術チームが Baton Rouge に滞在、筆者は物産現地から通訳兼 COORDINATOR として参加し、技術ライセンス、基本設計、詳細設計、機器調達、現場施工、試運転など石油化学計画の各段階を経験した。本計画はその後牛込柳町での小学生集団中毒？事件で四エチル鉛が原因とされ、日本での事業化は断念、既に完成していた山口県周南市富田の工場は廃棄された。

渡米するまで米国に関する知識は一通りのことしか持っていなかったが、実際に現地で暮らし初め、仕事をするにつれて米国の歴史、国情についてより知る欲求が出てきたので各州、各地を意識して巡るように心掛けた。今まで意識していなかったことが徐々に判ってきた。州が国に該当し、夫々独自の憲法を持ち、法制度などかなりの幅があること、日本と異なり中央（連邦）政府の力は限られていること、Louisiana Purchase, Mexico 戦争等での領土拡張と平行して原住インディアンを抹殺しての白人による征服により国の形が出来たこと、建国の偉人のかなりの部分が奴隷所有者であったこと、人権宣言の対象は白人であり、原住民、有色人種は対象として考えられていなかったらしいこと、などを学び、日本に対する占領軍の置き土産のインチキ臭さが見えてきた。

Texas から帰国後、若杉社長が訪イランミッションで Ahwaz 油田の排ガスの燃える様を見て有効活用検討の指示を出したことが発端となったと言われるイラン石油化学調査団の第 1 回からイラン通いが始まった。当初は油田排ガスの有効利用ということで細々と始まったものが、イランの油田採掘権供与の条件とすることがイラン側の方針となったため大ごとになってきた。結果的には日本側のコンソーシアムが石油探索の権利を入手、石油化学プロジェクト実現はそのための条件とされ、石油化学計画に対し、日本政府の円クレ、輸出金融も約束された。当初の天然ガスベースの 30 万トンエチレンプラント（10 万トンはイラン国内向け、20 万トンは日本向け）という単純なスキームから、東洋曹達、三井東圧化学、三井石油化学、日本合成ゴムなどメーカーの参加により、誘導品、最終製品が追加され、塩田、電解、ポリエチレン、塩ビ、芳香族、SBR、LPG など一大石油化学コンビナート計画となった。予算は当初 5,500 億円、建設が進むにつれて大幅に増えた。石油探鉱は採算の都合で中断され、謂わば「おまけ」の石油化学プロジェクトが順調に進行した。

イラン側は欧米風の、施主の IJPC が設計管理を請負うコンサルタントを雇い、建設業者を管理する方式を主張したのに対し、日本側は長期的な視野から業者との信頼関係醸成、保持に重点を置いた日本式の管理方式を主張、結局は日本式の採用となったが、施主と業者の間に立ち、施主側の利益を守るためのコンサルタント、という理解と、日本式のコンサルタントとの違い、利益相反（Conflict of Interest）に対する基本的認識の違いは埋まらなかった。

現地合弁会社イランジャパン石油化学社で社長補佐として計画全般を担当、後人事課

長として筆者は課長クラスとして上司及び部下のイラン人に挟まれて仕事を進めるといふ貴重な経験をした。クルド人、アルメニア人、アッシリア人などを含むイラン人、日本人、英国人などが各役職を占めていた。当時のイランは米国の影響下で復帰したパハレヴィイ国王のもと、日本を手本に近代化、工業化に邁進していた。NATO と並んで米国が作った CENTO (パキスタン、イラン、トルコ) があり、ソ連に対峙していた。イスラエル、韓国と共に北朝鮮とも国交があった。筆者もイスラエルにはイラン滞在中に訪問した。イスラエル全土を巡ったが、アフリカのヴィクトリア湖とイスラエルのガラリア湖のみで産すると言われる St. Peter's Fish の揚げ物が旨かったことを覚えている。聖ペテロはガラリア湖でこの魚を採る漁師だったらしい。

イランの石油関係会社(欧米系)の規則を踏襲し日本人社員も年間1ヶ月以上の帰国休暇と日本までのフライト代、ホテル代の補助も受けられた。その頃日本では世界一周フライトの航空券は買えなかったが、テヘラン発着の世界一周切符で中東、欧州、米国経由で帰国、その後イランに帰る帰国休暇を堪能した。そのころのイランはオマールハヤムの詩集、ルバイヤットがワインと美女を礼賛している例もある通り、飲酒は自由、千年以上の歴史あるワイン、キャビア初めペルシャ料理を堪能できた。

1978年夏、三井物産本社への転勤が発令され、アフガニスタン、インド、香港経由帰国の途についた。同時期にイラン革命が進行し、翌年のイラン国王の亡命、ホメイニ師の帰国を経てシーア派神権政治が発足、直後に米国の後押しでイラクがイランに侵攻、イランイラク戦争が勃発した。帰国後、マスコミへのイラン石油化学説明役として広報室に配属され、3年ほどマスコミとの交流を続けた。そのころに感じた日本独特の記者クラブ制度に対する疑念は今も持っている。JETRO 内に貿易記者クラブがあり、全国紙とNHKが加入していたが、外紙やテレビ局は会員となれず、記者会見にも参加できず、頻りに揉め事があった。日本の海外投資に関しては法律で海外投資保険付保が義務付けられていた。ところが、MITIの保険課長が、イラン計画がイラン革命で挫折した関係で保険金を支払うと保険自体が破たんするので支払えない、とコメントしたことに端を発し、日本中のマスコミが三井物産破産という噂をまき散らし始めた。さすがに貿易会、各商社が異論を唱え、最終的には保険求償が実現したが、斯様な無責任な事例を目の前にして感じたことは、巷間良く言われたカントリーリスクに関し、最も高い、危険な国は逆説的ではあるが、日本ではないか、という疑いを持っている。

その後化学品部門に戻り、中東三井物産副社長として化学品商売を担当することになり、バハレインに赴任した。イランでは FARSI (ペルシャ語) が使われているが、これはインドヨーロッパ語系で筆者が学生時代に学んだ古代ギリシャ語と似ている。文字はアラビア文字であるが、文法はギリシャ語風というわけである。対岸のサウジアラビア、バハレイン、カタール、UAE はアラビア語、全く構成の違う言語であった。回教の浸透に伴いペルシャ語の語彙に多数のアラビア語起源の語彙が使われるようになったのは日本語に多数の漢語の語彙が入って来たのと似ている。湾岸諸国は従来英国のインド経済圏のもとにあり、戦後しばらくはインドルピーが通貨として使用されていた。大戦直

後、デンマークの考古学者がバハレインで発掘した Dilman 文化の遺跡からはバビロニアとモヘンジョダロ双方の単位が使用されていた証拠がみつき、バハレインはいわば両文明の交流、貿易の仲介役であったことが確認された。

バハレイン駐在中、中東各国を巡回した。その後、サウジアラビアの Al Khobar 事務所の所長として転勤した。バハレインと Al Khobar の距離は海を隔てて 40 km ほど、世界で一番短距離の国際線による転勤であった。その後オランダの業者による Causeway が完成し、禁酒のサウジアラビアから車でバハレインに行き、ビールを飲んでからサウジ側に帰宅する、ということも出来た。因みにバハレインは二つの海（バハル）という意味である。島の廻りの海と島に湧く泉が二つの海という表現の源と聞く。アラビア語には単数、複数に加え両数という、「二つの」という意味の名詞変化がある（偶然かも知れないが古代ギリシャ語も同様）。その頃、UAE（アブダビ、ドバイ、シャルジャ、ウムムルカイワイン、アジマン、ラスルハイマ、フジャイラ）、カタール、オマーンの湾岸諸国は第一次、第二次オイルショックを経て、産油国として成長し始めていたが、現在のドバイの発展に比べると未だ辺境の感じから抜け出していなかった。中東一のフリーゾーン、Jebel Ali はまだ姿を現していなかった。

Alkhobar はサウジアラビア東海岸の町でアラムコの本拠もあり、北西には Kuwait、アラビア石油の本拠 Khafji、Jubail 工業地帯などがあるいわば Houston みたいな町である。他のアラブ諸国と異なり、女性は車の運転はできない、一人での出歩き、旅行もできない等イスラムの厳しい戒律が施行されており、日本人にとっても異次元の世界で



メッカ手前の標識 これより Moslem 以外は立入禁止

ある。飲酒も禁止、タバコはOK、買い物・レストランでの食事の最中でも日に5回の礼拝の時間になると店から締め出されたりすることがあった。レストランには Family Corner という場所があり女性、子供はそこで、一般席は男性のみ、という取り決めもあった。テレビの女性アナウンサーのスカーフから髪の毛がチラリと見えた、見えなくて大騒ぎとなったこともある。斯様な次第で、慣習・文化の違いを乗り越え貿易・投資の実務を進めるのは苦勞もあるが、慣れない

環境下での仕事の達成感は一入で、その積重ねを三井物産時代に体験し、それを基に ODA 関連の業務にスムーズに入れたことは幸運であった。

参画した主な ODA 案件と所感

1992 年、三井物産からユニコ・インターナショナル社に移り、商社での経験に基づいた、貿易促進、物流調査、産業開発、プロジェクトエンジニアリング、市場調査、統計、中小企業育成などの分野を担当した。参画したプロジェクトの内印象に残ったものについて紹介したい。

最初に参加したのは1992年のSingapore 包装技術センター開発計画調査。合成樹脂、包装関係の経験を買われての参加であった。同国はDAC基準で途上国範疇を卒業の時期で、これがJICAの同国に対するODAとして最後の年のものではなかったかと思う。1970年代以降商社マンとして何回となく訪問した時代からは様変わり、開発も進み、国に勢いがあつた。次いで翌年のVenezuelaのヨークス炉建設計画調査でのヨークス炉副産物化学品の欧米市場調査担当、次が1993年のOman工業開発基本調査、この国の岩と砂漠と海の景観に魅せられその後JICA案件数件を含め十数回訪問し、ほぼ全土を踏破した。特にHormuz海峡を隔てイランを望む飛び地のMUSANDAM半島の荒涼たる景色を気に入り、何回も通ったことを思い出す。Hormuz海峡の閉鎖に備えて半島を横切る運河を開削する案は何回となく提案されたが、その候補地は300メートル位の幅であるが、実際に現地に足を運んだのは日本人では筆者を含め数える程しかない。一帯は岩山と海、荒涼とした風景で「猿の惑星」のロケが行われた。フィヨルト的な景観、入り組んだ海岸線、海に落ち込む岩壁など観光資源としての価値が今後出てくると思っている。最近Hormuzを迂回するパイプラインが完成し、Fujairaからの輸出が可能となったので、多分この地峡開削の案は実現しないだろう。



Musandam 半島最狭部分, 幅 300m

シンドバードが船出したと言われる Sohar 港は一大工業港として発展している。同地の Suici 社の肥料工場の F/S を JBIC のために行った。湾岸の化学・肥料工場の技術者は概ねインド人、この工場の管理者レベルも同様で、筆者の駐在していたサウジアラビアで近所のサウジ肥料に居た技術者と会い、その経験から技術的には問題なし、との判定を同僚の技術屋が行った。

オマーンは過去には現UAEを含めた地域を支配、ポルトガルが一回侵略した湾岸を取り返し、更に対岸（現パキスタン）のGWADAR、現タンザニアのザンジバルを支配した後長い衰退期を経て現国王の下で復活し、「賢明なる独裁者」による安定した政情を謳歌している。Vasco da Gama インド航路を発見した、との話が史実として流布されているが、現実には Mozambique で Gama がオマーンの一部であった現 Ras al Khaimah 出身の Ahmed al Majid を雇い、彼の案内で季節風を利用してインドに直行出来たのであり、アラブ商人が支配していたインド洋に忍び込み恰も新航路を発見したかのように報告した（ポルトガル側視点）ものが白人支配の下で定着したものと思う。

シリア繊維産業開発：1997年、長年コメコン市場への輸出が主力であったシリア繊維産業をソ連崩壊後市場経済に対応した競争力を持つ繊維産業に転換を支援するプロジェクトにユニコは東レ、東洋紡その他の経験者を含めたチームで参画した。アサド(父)独裁政権下で、政治的には不自由ながら平和を享受していたシリアは、昨今の混乱からは想像もできない安定した状況であった。シリア繊維産業の全工場をめぐり、休日には

その近辺の遺跡を探索した。当時は管理が行届かず、立入は Palmyra を含め自由であった。訪問先では紅茶か真っ赤な酸味の強いハイビスカスのハーブティー(Karkade)が供される。現地では酸味を和らげるためか、砂糖を入れて飲まれている。後年スーダンの貿易促進アドバイザーとしてスーダンに滞在した際、これがスーダンの特産品である



ハイビスカス
(Karkade)の花の乾燥

こと、最近欧州、北米以外に日本にも浸透し始めていることが判り、毎年幕張で開催される Foodex Japan の JETRO ゾーンのスーダン小間で紹介している。イスラム教徒の多いシリアではあるが、夕食前の酒は不可欠。先ず Arak (葡萄ベースの蒸留酒。Anis が加えてあり、水で割ると白濁する)、次いでビール、次にワインという順番で、「取敢えずビール」の日本人は吃驚する。Araki はトルコでは Raki、ギリシャでは Ouzo と呼ばれ、フランスでは Absynthe (アブサン) となる。一時期健康上悪いとかでアブサンが禁止されていた間に飲まれていたものが Pernod や Ricard である。同地域の産物にはからすみ (アラビア語で Batarik)、これもトルコ、ギリシャにも産し、イタリアーでは Bottarga、最近日本のイタ飯屋でも出てくる。ポルトガル船が地中海から、ボラの卵を天日干しする技術を台湾、九州に伝えたのではないか、というのが筆者の仮説であるが、証拠はない。エジプト、ギリシャ物はパラフィンで包んであり可成り日持ちする。

1998 年に参加した Argentina の Hiparsa 社再活性化プロジェクトは、パタゴニアの磁鉄鉱を原料に直接還元鉄の製造も視野に入れた計画であった。高炉を使う伝統的な製鉄に比べ小型化が可能、コークス製造工程を省ける画期的な技術であり、日本の神戸製鋼が実用化に成功し、アラビア湾岸、Venezuela、米国で企業化されているが、その後の既存高炉製鉄業をM&Aで規模拡大を成し遂げたミタルなどの大手鉄鋼会社、中国の進出により先行きは不透明になっている。本件は磁鉄鉱の採掘が地下坑道で行われているため鉱石が高コスト、などの要因で不調に終わった。

Brasil の Ceara 州 Pecem 工業港拡張調査では、調査中に起きた、銀行の地下金庫からトンネル経由で数千万ドル相当の現金が盗まれた事件があり、世界中に報道された。州都は Fortaleza、一時オランダが支配したが、その後ポルトガルが奪還、Brasil からは外国勢力は一掃された。

2005 年に国際開発アソシエイツ社に入社。当社は基本的には各社員が個人型の調査案件を担当する形が多い。最初の案件は 2007 年からのケニアの中小輸出業者向け貿易研修プロジェクト、正に筆者の昔執った杵柄であり、仲間には三菱商事、トヨタ通商、旧東銀のOBが居り、品質管理、研修実施の専門家と共同で貿易研修実施の最強チームが編成され、成功をおさめた。現地コンサルタントの育成も手掛け、彼等が貿易実務、中小企業経営のコンサルタントとして、現在現地で活躍中である。とはいえ、ケニアは選挙後の混乱で一時的に乱状態となり、モンバサ港、Tanzania の Dar Es Salam 港から内陸の Rwanda、Uganda、Burundi への物流が困難となり、両港からこれら諸国への物

流経路の改善が焦眉の急となった。特に Tanzania と Rwanda 国境の Rusumo 橋の移設による拡張・補強の必要性が高まり、筆者は 2009 年、JICA 調査団の一員として、物流予測の作業をおこなった。現在 Rusumo 橋の架け替えプロジェクトが進行中である。

2009 年、ドミニカ共和国の貿易研修計画専門家として派遣された。当初 JETRO の指導で発足したが、輸出促進の具体的指導のため JICA の専門家派遣が要請されたものである。貿易研修の実施と平行して輸出競争力、具体的にはコスト削減と、品質向上に関して、先ず 5 S の定着から開始、米国向けの家具輸出と、胡椒の収穫の生産性向上を狙い、所期の成果を上げた。同国はコロンブスが最初に上陸したイスパニョラ島であり、コロンブスの屋敷、新大陸最初の欧州人街が残っている。紆余曲折の後コロンブスの遺骨が本人の遺言により収められている巨大なモニュメントがある。コロンブスは原住民インディオを虐殺、酷使し、更に後年アフリカから奴隷が導入された。その子孫が国民の大部分を占めるドミニカ共和国では、コロンブスは侵略者であり、その来訪を記念するコロンブス新大陸発見 500 周年祭りなどとてもないとの反対運動がおこり、話は沙汰止みになったとのこと。この点、米国などの単純な白人の新大陸発見の祝いとは異なる感情を原住民、アフリカ系住民は持っている。



黒胡椒農園



コロンブスの息子（総督）の宮殿(Alcazar)

尚、この島の西の部分にはハイチ国があり、これは奴隷が自らをフランスの軛から解放して設立した国である。一時ドミニカ共和国も支配下に置いたが、現在は最貧国となってしまっている。黒人のガヴァナンス不足なのか、旧宗主国のフランスの執拗な賠償取立てによるものなのか、はたまた、米国による経済侵略による自作農階級の消滅によるものかは明確ではないが、アフリカ諸国での、欧米の操縦による現地住民同士の内戦による混乱を見るにつけ、彼等の自立、独立自尊の目標達成には程遠いと感じる。米西戦争を仕掛けてスペインからキューバ、ドミニカ共和国、フィリピンなどを取上げた米国はその後なにをしたのか。米西戦争を CUBA 沖で観戦した秋山参謀は、米海軍マハンに学び、その後日露戦争の対馬沖海戦で大勝利を収める功績を残したが、米西戦争を如何に思っていたのか知りたいところである。

2013 年 11 月からスーダン国貿易促進アドバイザーとして 1 年半ほど同国と往復し、経済省を中心に実務的な支援を行った。中東三井物産勤務のとき、中東各国に出張したが、当時スーダンでは酒を飲むことが出来た。1980 年代半ば、サウジアラビアとの関係が緊密化し、突然禁酒令が発布された。爾後もキリスト教徒の多い南部を中心に禁酒令は無視されていたが、南スーダン分離後は南では酒が自由に飲めるようである。以前から綿花、アラビアゴム、野菜、果物、落花生、Karkade (ハイビスカスティー)、ゴマ

などの輸出が盛んであったが、石油の発見後石油頼りの経済に堕し、農工業を等閑視したので南スーダン分離後、農産物・工業製品の輸出促進を画策した。とはいえ鉱業省、石油省などに比べ極端に予算配分が劣る貿易省の増員、活性化には国のトップの理解・指導が必要であるが、輸出促進閣僚会議や JETRO 的輸出支援機構の設置の提案さえ実行されていない。ビンラーデンを擁護したとされるサダムフセインとスーダンのバシール大統領が、イラクではでっち上げの理由で侵攻され、本人は殺害された。バシール大統領は国際司法裁判所から逮捕状が出されたが、旧ユーゴスラヴィア・セルビアのミシェロヴィッチが Genocide 容疑（敵対国の行状は無視）で逮捕されたことを連想させる（欧米の気に食わない奴は殺せ）。加えて米国は貿易制裁をスーダンに課しており、米ドルでの決済、米国へのスーダン産品の輸入は Coca Cola などに必要なアラビアゴム、Planters 社などのローストピーナツ原料の小粒ピーナツを除き禁止している。最近緩和の動きがある模様だが、全面解禁は近い将来には困難との見方が有力である。

一方、輸出促進の具体的方策の積み上げは日本向けには残留農薬問題で中断しているゴマ輸出の再開に向けた対策、幕張で毎年開催される Foodex Japan への継続的参加、ドバイでの Fair 参加によるスーダン産品 PR などを指導、現在進行中である。日本車はスーダンでも人気あり、米国経済制裁下でも輸入されているが、時々米国から様々な理由で自粛の要求があるようだ。尚、スーダンのタバコ会社は日本の JT が保有しているが、経営は完全に現地化されている。米国の制裁下にあっても中共、韓国は全く意に解せず進出、交易関係が続けているが、日本は米国との関係上大規模な支援を自粛せざるを得ない立場にあるようだ。



バオバブの木 Madagascar 島の固有種とされているが、スーダンの Kordofan 州にも自生している。同州の州花であり、花卉、果実を水に溶かして飲用に供する。

スーダンとの関係は今でも続いている。ボランティアベースで毎年の Foodex Japan の JETRO スーダン小間への参加社への協力、センナ（生薬緩下剤原料）の日本向け輸入協力、ゴマの日本への輸入再開準備協力など「腐れ縁」が続いている。一般に JICA の協力はプロジェクト的な考え方で期間・予算を決めて行われると思うが、これは道路、橋梁、施設など箱ものを伴う、金額の張るものが多い。これらは目的物の完成で一応の結果が出るのでそこまでのプロジェクトとして規定される。その後の運転、補修を視野に入れた追加の協力が行われることもあるが、一件落着の時点で「左様なら」とせざるを得ない事情もある。それに対して、貿易促進、研修、生産性向上、教育などのソフト分野ではその協力の成果を挙げるためには一回限りの支援に加えて反復、継続により効果が倍増し、定着する。この点でスーダンの貿易促進案件では Follow up Seminar の実施、シニアボランティアの派遣などが計画されているのは喜ばしい。